

助産院と小児科クリニックの融合

悠育助産院

桑原 勲、谷口利絵

助産雑誌(医学書院), vol.68 no.3:208-221, 2014

はじめに

悠育助産院(以下、当院)は分娩を扱う助産院であり、小児科クリニック(くわはらこどもクリニック:以下、小児科)を併設しています。私は当院と小児科の両方の開設者(経営者)であり、助産師の谷口は当院の管理者として実務のすべてを行っています。

一つの建物に当院と小児科が存在しており、入り口は別でそれぞれのエリアは分かれているものの、中で行き来できるような構造となっています。1階部分は当院と小児科の外来が、2階は当院の入院施設で、居室(2部屋)や分娩室、キッチンなどがあります。分娩室は畳の部屋で、お産の時には布団を敷き、自由な姿勢でお産ができるようになっています。常駐するスタッフは現時点では助産師一人で、必要時に小児科の看護師がサポートすることになっています。分娩には必ず私も立ち会います。お産の後の赤ちゃんの管理は私が行い、毎日の診察・黄疸のチェックに加え、必要時には光線療法や血液検査まで行うことができます。

開院までの経緯

私は一般小児の診療に3年間従事した後、10年間NICU(新生児集中治療室)に勤務しました。NICUに入院する赤ちゃんの多くは早産で生まれた未熟児であり、その多くは数か月間の入院生活を余儀なくされます。そのような長期の母子分離が母と子の絆の形成に影響し、退院後にさまざまな問題が起こっていることが報告されるようになりました。それ以降はNICUでも、お母さんと赤ちゃんが生後早期から接触できる機会を可能な限り増やすための工夫がされるようになりました。

しかし、このようなハイリスク新生児は全出生の1割にも満たないものであり、大部分の赤ちゃんは満期で生まれます。当時の日本の多くの病院や産婦人科医院では、たとえ母子ともに健康であっても、入院中のお母さんと赤ちゃんは離されて管理されることが多く、それが当然のこととして行われていました。

NICUでの経験を通して、普通に産まれた赤ちゃんがお母さんとずっと一緒に過ごせる環境を提供したい、そのような思いから2002年に産婦人科医とともに開業しました。開業後はすべての分娩に立ち会い、約3000例のお産に立ち会いました。その中で感じてきたことをさらに理想に近いものとするために、2012年10月に現在の形で開業することになったのです。

分娩に立ち会い感じたこと

私が立ち会ったお産の大部分は畳のスペースでのフリースタイル出産で、ほとんどがトラブルなく、赤ちゃんの蘇生を必要とすることはほとんどありませんでした。開院から時間が経つにつれて、生まれてくる赤ちゃんの状態だけでなく、お母さんの様子にも目を向けるようになりました。

そんな中、生まれてすぐの赤ちゃんを抱っこするお母さんの中に「よく頑張ったね」「可愛い」などと、赤ちゃんに声をかけてくれるお母さんがいることに気づくようになりました。つい先ほどまで陣痛の痛みで長時間さらされて疲れきっているはずのお母さんが、ちゃんと赤ちゃんのことも意識できていたのです。これを理解するためには、分娩間際からの立ち会いだけでは分からないと思い、赤ちゃんが生まれる数時間前からお産に立ち会わせてもらうことにしました。そこで見えてきたものは、以下のようなことでした。

お産が順調に進むには、お母さんがリラックスできること、お産の流れに任せて自分のありのままを出すことができる雰囲気が必要であり、お母さんを1人にするのではなく常に寄り添い、「自分は大切にされている」とお母さん自身が感じることができる環境が重要なのだと思います。そのためには、一緒に立ち会う家族に加えて、寄り添っている助産師の存在がとても大事になります。お産が進むにつれて、まず2人の間の信頼関係ができることで、お母さんは安心してお産に臨むことができるようになり、繰り返し寄せる陣痛の中でお母さんには気持ちの余裕ができ、一緒に頑張っている赤ちゃんのことをちゃんと意識できるようになっていきます。その結果、お母さんにとっても赤ちゃんにとっても一番いいタイミングで生まれてきてくれるのだらうと思います。このようなお産ができたとき、お母さんは「産ませてもらった」のではなく「自分の力で産んだ、やり遂げた」と感じることができ、どれほど疲れていても赤ちゃんをしっかり抱っこし、赤ちゃんにねぎらいの言葉をかけてくれるのだらうと思ったのです。

当院のお産

当院で扱えるお産は、いわゆるローリスクのお産のみです。一人の助産師が妊娠初期からお母さんと継続して関わることができ、分娩までに十分な信頼関係を築くことができます。小児科を併設することで、私も妊娠中から十分に時間をかけてお母さんとかかわり、赤ちゃんのことについての情報提供をすることができます。そしてすべてのお産には、私が立ち会うこととなります。このような環境を整えることは、お産をするお母さんの安心につながるだけでなく、お産を介助する助産師を急変時も含めた赤ちゃんへの対応から解放することになり、お母さんだけではなく助産師も、よりリラックスした精神状態でお産に臨めるのではないかと思います。このような関係・環境が、「いいお産」のためにはとても重要なことだと思っています。

開院から1年余り。当院でお産をされたのは、まだお1人のみですが、そのお母さんが、当院でのお産のことを振り返っての感想をお寄せくださいました。ご本人の承諾を得て、原文のまま紹介させていただきたいと思います。

第2子である長女を出産してから幾月か経ちましたが、お産の日のことや入院中のことは何度も思い出しています。何度も思い出しては幸せをかみしめているのです。

お産中、陣痛はつらいのですが、意識はとても鮮明で、赤ちゃんが少しずつ出てくよとしていくのが感じられました。信頼している谷口先生と桑原先生、看護師さんだけが見守ってくれているほかは、誰もいない静かな環境で、恐怖や不安といった感情に邪魔されず、産むことだけに集中できたお産でした。生まれてきた娘も湯上りのようなさっぱりした顔で、とても元気でした。

産後はずっと娘と一緒に部屋のベッドで過ごせました。産んで次の日は長男と夫もいて、家族四人で昼寝をしました。入院中、長男とも自由に面会でき、抱っこしたりしっかりとふれ合う時間をもて、彼も生まれてきた娘を家族として自然に受け入れてくれたと思います。

長男を出産した時は母児異室制で3時間ごとの授乳室での授乳以外は児と会えませんでした。乳房がずきずきと張り、次の授乳時間がくるまでつらい痛みを耐えていました。耐

えながら「うちの子、泣いてないかな、何してるのかな」と思い、寂しくなったことを覚えています。

今回は、隣にいる娘がふにゃふにゃと泣いたらおっぱいをくわえさせ、それ以外の時間はおむつを替えたり頭をなでたり顔をじーっと眺めたり…。食事毎も毎食温かくておいしく癒されました。娘の世話以外何もせず、わが子をただただいとおしいと思う時間をのんびりと持てたこの入院期間は、本当に幸せな時間だったと思います。

退院してから2人の子の育児に忙しくしていますが、娘が生まれた日のことや入院中の穏やかな日々を思い出すと心が休まります。産後も気持ちに余裕があるのは、2人目だからというだけではないような気がします。自分の選んだ場所で無事に出産ができたこと、産後から母乳だけですくすくと娘が育っていることなどが自信となっているのだと思います。将来、子どもたちにお産の日のことを話すのを楽しみにしています。

親と子を包み込む環境を

これまでも育児支援や虐待予防のための方策として、妊娠中や産後のかかわり方が議論されてきていますが、われわれ医療者がお産にどうかかわるかという最も重要と思われる部分が、大きく抜け落ちていたように思います。三砂らは「温かいケアを受けられているという快適な環境において、何にも管理されていない『全てを自然に委ねた状態(分娩中に女性が何か大きな力に動かされたり、本能的な行動をとったりしているような状態)』まで心身を解放するところに『いいお産』の本質があるのではないか。」と述べています。また、このような豊かな出産体験をすることにより、産後の育児困難感が減少し、子どもへの愛着が高まり、さらに次の妊娠・出産への意欲が高まることが示されています¹⁾。

お産の安全性や快適性は、親と子の将来をも見据えて考えるべきではないでしょうか。助産院と小児科が共存することにより、お産を中心として妊娠の初期から親子の成長過程までを、助産師と小児科医が共に途切れることなくサポートすることができる体制ができました。親と子が、温かく見守られているという安心感の中で、「こんにちは」と出会い歩き始めることができる、そんな場をこれからも提供していきたいと思っています。

引用文献

1) 三砂ちづる: いいお産とはどのような体験か. 助産雑誌, 63(1):22-31, 2009